新社名「株式会社スズキッド」10月1日スタート

スター電器製造株式会社が社名変更

オフィスも拡張し改装、さらなる飛躍を目指す

小型溶接機のパイオニア、スター電器製造株式会社（神奈川県藤沢市）は今年10月1日付で社名を「株式会社スズキッド」に変更、オフィスも移転し新たなスタートを切った。同社は先代の鈴木樹氏が1960（昭和35）年1月に溶材商社として創業。71年に電気溶接機のメーカーポジションを確立した。99年には樹氏の長男である鈴木穣氏が経営を引き継ぎ、着実に業容を拡大しながら現在に至っている。今号では、社名変更を機にさらなる飛躍を目指す同社の取り組みを鈴木社長のインタビューを交えながら紹介する。

■スズキッドの足跡

同社は1960（昭和35）年1月、基本方針を「限りない事業の発展を通じてより多くの人々に幸せをもたらすこと」と定め、溶接機械・電気機器・機械工具等の販売を主業務に創業した。以後、一歩ずつ着実に歩みを進め、71年5月には「SUZUKID」（スズキッド）の商標を制定し、「日本で一番小さな溶接機を作る一番小さなメーカー」としての産声を上げる。念願であった独自の技術開発力と生産能力を備えた電気溶接機メーカーへの脱皮を遂げるとともに、「小型溶接機のパイオニア」としての第一歩を力強く踏み出した瞬間であった。

■DIYブームで基礎築く

時をほぼ同じくして、欧米で生まれた「Do It Yourself」（DIY）の思想をもとにした、ホームセンターという新しい流通業態が国内にも生まれ、世相も後押しして日曜大工ブームが巻き起こる。それは、メーカーとしての新たなスタートを決断した同社にとって、まさに願ってもない市場の誕生でもあった。ブームを起こす溶接機との思いで名付けた「ブーメルト」が名実ともにブームを巻き起こし、一般家庭へのさらなる普及を目指し名付けられた「ホームアークシリーズ」も大ヒット。日曜大工のTV番組でも取り上げられるほどとなり、前代未聞の百貨店での実演販売なども行い現在のホームセンター業界における「溶接」というカテゴリーの確固たる基礎を築いていった。

その後もアイデア満載の斬新な商品を次々と市場へ投入し、「溶接シーンに新しいスパークを」というキャッチフレーズを具現化。そして現在では主力である家庭用溶接機のみならず、プロ仕様の各種アーク溶接機、エアープラズマ切断機、液晶自動遮光溶接面、溶接棒、ガス溶断機など多彩な溶接関連製品をラインアップし、多様化するユーザーニーズに応えている。

このほか同社では、パートナーを集い全都道府県に誰もが気軽に溶接体験ができる「WELDERS POINT」というネットワークインフラの拡大と構築に取り組むとともに、溶接コミュニティサイト「溶接人」（ようせっちゅう）の開設、日本で初めて開かれた溶接ワークショップ工房「Fe★NEEDS」の運営、さらには一般公募の溶接作品コンテスト「溶接人杯」の開催など、溶接人口のさらなる拡大に向けた積極的な企業活動を展開中である。

スズキッドの「イチオシ」商品

■青色遮光プレート

9月12日に新発売した青色遮光プレート＝写真＝「P－415」（遮光度#10）および「P－416」（遮光度#11）は、製造上の理由により惜しまれながら廃番となった青色遮光プレートをユーザーからの要望に応えて更に進化させた形で復刻させたもの。

最大の特徴は、ガラスとプラスチックプレート層を重ねることで、従来のガラスプレートと比較して耐熱性がアップするとともに、色の個体差がなくなり、さらに鮮明に見やすくなった点。保有している手持ち面やかぶり面に取り付け可能だ。

■交直両用ティグ溶接機

100ボルト・200ボルト兼用フルデジタル交直両用ティグ溶接機「スタルゴンACDC200」＝写真＝は、MIX溶接モード、パルス溶接、波形など様々な溶接条件を設定できる「PRO TIGモード」と母材の板厚を設定するだけで自動で溶接条件が設定できる「EZ TIGモード」の二つのモードを搭載している点が最大の特徴。

PRO TIGモードに搭載しているMIX溶接モードは、アルミ溶接で交流ティグと直流ティグをかけ合わせた溶接が行えるもので、交流ティグだけより溶込みが深くなり、電極棒の消耗が少ないなどのメリットがある。また交流ティグの波形はソフト（三角波）、スタンダード（正弦波）、ハード（矩形波）の3種類からビード幅と溶込みを選択することが可能となっている。

■ポータブルスポット溶接機

6月に新発売した100ボルト・200ボルト兼用ポータブルスポット溶接機「VESSPO」＝写真＝は、タイマー機能の搭載により一定の時間で溶接することができ、溶接の仕上がりを均一にすることが可能な点が特徴。タイマーが不要の場合、解除することもでき、溶接条件も求める溶接の仕上がりに応じて板厚と溶接時間の調整が可能だ。搭載されているパルススポット機能により、ワークへの熱影響を抑制し、ひずみのない高品質な溶接を実現する。

アームの加圧調整も可能なことに加え、オプションの500ミリアームを使用することで、奥まった場所や長い材料の溶接も可能。板厚は200ボルト使用時、最大3ミリ＋3ミリの溶接が可能だ。

スズキッド社長 鈴木穣氏に聞く

「一家に一台、溶接機！」の実現へ

一般社会と溶接産業界をつなぐ架け橋に

――社名を変更された経緯は

「まず営業を担当していた若いころから、『なぜブランド名と社名が違うんだろう？』と違和感を抱いていたことが前提にある。流通の皆様には『スターさん』『スター電器さん』などと呼ばれていたのでそれはそれでよかったのだが、やがてブランドの認知が広がるに従い、プロ、一般消費者問わずユーザーの方々からはブランド名の『スズキッド』で呼んで頂けることが顕著に多くなったのを肌で感じていた。つまり、ブランド名と社名がユーザーの方々の中で一致しなくなっていたといえる。

それを象徴しているのが、大きな展示会などBtoCの展示会においてフロアマップに『スズキッド』の名前が見当たらず、ブースを探すのに苦労したという話をよく聞くようになったこと。そこでこれからはユーザーの方々と距離を縮めダイレクトに接していく時代になったとの判断から、社名とブランド名である『スズキッド』を統合することとした。但し、社名のロゴは創業の精神を忘れないようにしようとの思いから、あえて創業当時の昭和のフォントのままのカタカナ表記とした」

――「スズキッド」のネーミングの由来は

「昔は松下電器産業の『ナショナル』に代表されるように、社名とは別にブランド名を設けるケースが多かった。そこで名字の鈴木から『スズキ』とアメリカ西部開拓時代の西部劇の英雄ビリー・ザ・キッドのキッドと子供を意味する『キッド』を組み合わせた『スズキッド』が誕生したと聞いている。キッドには『小型溶接機のパイオニアとして、小さな溶接機メーカーでありながらもともに大志を抱いて進んでいこう』という意味が込められているほか、社員を総称して『スズキッズ』と呼び、連帯感、一体感を高めている」

――事務所も移転された

「9月末まで当ビル（三井住友海上藤沢ビル）の3階に本社と営業所を構えていたが、手狭になってきたことと、今回の社名変更を機に5階へ移転することにした。5階は3階よりも倍ほどのスペースがあり、とても広々として仕事がはかどると社員からも好評だ。フリーアドレスではない中で、『買っていただいた後』が最も重要だと思っているので、今後も買っていただくだけでなく、製品の性能や機能の向上、周辺便利ツールの開発等アフターサービスを含めて使い続けていただけるような環境づくりに取り組んでいきたい」

――パーパス（存在意義）について

「DIYだけでなく、産業界へも貢献していきたいとの思いから『一般社会と溶接産業界を繋ぐ架け橋となる』を掲げている。一般消費者でも手軽に取り扱うことができ、かつプロにも使っていただける溶接機まで手掛けられるのは当社だけと自負しており、溶接を知ってもらう切っ掛けを当社が作り、いずれ溶接を仕事にしていただけば、そこに当社の存在意義を見出せると確信している。社会や生活に欠かせない基幹技術である溶接にスポットライトを当てていきたい。そしてミッション（使命）は『誰もが溶接を始め、続けられるようにする』。以前は溶接機を買ったはいいが、そのうち納屋に眠ってしまっているというケースも多かった。私は『買っていただく前』『買っていただく時』『買っていただいた後』のいずれの時も『センスが良い』とお褒めの言葉をいただくことが多い」

――最近はプロ向け商品の開発も積極的に展開されている

「最近の傾向として、DIY向けでコロナ禍の巣ごもり需要が落ち着いた反面、プロ向けについては受注がグングン伸びている点を強調したい。そのターニングポイントとなったのが、2019年秋に発売した自動遮光溶接面『アイボーグ180°』だ。同遮光面は日本初の液晶式3面自動遮光溶接面として発売したもので、180°パノラマワイドビュー（視界）を備え、遮光前の視界は装着したままでも作業準備が可能な明るさを実現した点などが大好評を博した。

そこからプロの方の当社を見る目が確実に変わったように思う。『スズキッド、なかなかやるじゃん！』みたいな（笑）。そのうち溶接機や切断機にも興味を示していただけるようになり、今ではDIY、プロ問わず、多くのユーザーに当社商品をご愛用いただけるようになった」

――ここ数年で貴社の「DIY向け小型溶接機メーカー」というイメージが完全に払しょくされた

「その通りで、当社が取り組んできた溶接作品コンテスト『溶接人杯』（ようせっちゅうはい）の開催や溶接ワークショップ工房『Fe★NEEDS』（フェニーズ）の運営など当社がただ単に溶接機を売るだけでなく、溶接人口の拡大に向けて取り組んでいる姿勢に対しても、プロの方々からご評価を頂き、応援してもらえるようになったことは、まさにパーパスである『一般社会と溶接産業界を繋ぐ架け橋』を具現化できたものと素直に嬉しく感じるし、方針が間違いではなかったと自負しているところだ」

――今後の新商品開発について

「当社の溶接機で代名詞的存在がノンガス半自動溶接機『アーキュリーシリーズ』。シリーズ最新製品はインバータ式の『アーキュリー80NOVA』だが、その他に現在販売しているアーキュリーシリーズについてもすべてインバータ式に刷新し、2025年春以降の発売を目指す」

――今後の抱負を

「商品も世の中も変化のスピードが速いため、あまり10年、20年先のビジョンを語るのは現実的ではないと思っているが、リアルとオンラインのハイブリッドでの溶接迷子救済のためのインフラの整備を図りつつ、金属を切る・繋ぐだけでなく、開ける、曲げる、磨くの全てをワンストップで提供出来るメーカーを目指して商品開発に注力し、モノのためにもコト、コトのためにもモノの両立を図りたいと考えているので、ぜひともこれからのスズキッドにご期待いただきたい」